


 続

 徒然  
つれづれ

## 生活ごみと住民の良心

桑野 巍

「いまの悩みは物があふれている中での生活だ」という少し古手の儉約家の弁に注目、贅沢を戒めての態度だろうか。私にも悩みはあるが、願いは「毎日心地よい生活がしたい」で欲張りだ。とはいえ現代の消費者たちは老いも若きも多少の悩みと閉塞感を感じながらも飽食潤沢の時代を楽しんでいるように思えてならない。そして現代人はキレイ好きも自認しているのだ。ところが毎日生活を営む中で人々は必ず生活ごみを排出、一まとめにすると生活ごみと共存しているのが現代人だともいえる。

毎週月曜と木曜日の午前9時30分ごろ、生活ごみの回収車が来ると「一体このごみはどこで処理されるのか」にぶつかる。回収車のスピーカーから「家庭ごみは一戸一袋にしましょう」を聞きながら、一度処理工場を訪ねてみたいという欲望が持ち上がった。そこで堺市広報課にお願いし、クリーンセンター（東区石原町）の処理工場を見せてもらうことにした。2月上旬のことである。

工場は想像していた規模より大きく立派だった。環境事業部の担当者から生活ごみの搬入、計量から脱臭、燃焼、あと処理などの説明を聞いた。工場は24時間コンピュータ制御で効率よくコントロール焼却されており、最終工程では生活ごみの変身ぶりにお目にかかった。排ガスの清浄化、集じん灰の処理、放出熱利用・発電と電力販売など無駄のない仕掛けで、地球環境保全のための施設だということもわかった。

市内の小学生を中心に年間約9,000人の見学者が訪れることも教えてもらったが担当者にも悩みがあると聞いた。それは施設の老朽速度で、機器類の寿命見通しと財源の調達が最大の問題らしいこともわかった。生活ごみの処理は一日たりとも休むことが出来ないため、計画的運用の継続が必要で将来見通しが立て難いという悩みもあるという。

このところ自治体の懸命な減量呼びかけで生活ごみの量は前年比6%減少と幸いな傾向というが、排出者のマナーは一向に改善されないのが実情とも聞いた。生活ごみを出すルールを住民が守らない、守ろうとしないケースが各所で見えるというのだ。「排出ごみはタダで処理、役所がやるのは当然」という

思想が幅を効かしているらしい。リサイクルとかりユースとか大声で叫んでみても若い人たちはうわの空“もったいない思想”なぞ芽生えて来ていないということか。

生活ごみは雑多で燃えるものも燃えないものもあるが、ある時住民から「財布と重要書類をごみの中に入れてしまったので回収車を止めて探して」という緊急依頼があり、ごみ処理を手間どらせたこともあったと現場の担当者から聞いた。大事に至らず笑話で済まされたが、住民のごみ出しにも点検が必要であろう。掃除や片付けが苦手な住民も一人ひとりに生活ごみ対策係長の辞令を出したい。

ある人が「ものは少なく友人は多く」と言っていたが、当方はものに鈍感で管理能力レベルの低い消費者だ。“係長”は土台無理なのだ。しかし、生活ごみの出し方マナーには律気と心得ているつもり。自家の生活ごみが何かの理由で2個以上になれば、回収車が来るのを待って「ご苦労様です。ありがとう」と声をかけるのだから、まだ良心がある方だ。

自治体によっては「ごみゼロ」運動を展開しているようだが、これは無理だ。限りなくゼロに近づけることも不可能だろう。ゼロに近づければ生活ごみの処理工場は開店休業状態に陥るだろうが、この光景は想像することさえ難しい。関東地方の自治体が「各家庭は排出したごみにも責任を持つべきだ」としてごみ袋に名前を書かせることにしたところ、住民からの苦情が相次いだという話を聞いた。

自治体の内部でごみ責任論を展開し、広報紙などで住民に呼びかけるという勇気ある決断と受け止めた。担当課では「名前がなければ持って行かないようにすべき」という強硬論を主張したり、「しつこく広報するしかない」との態度をとった。ところが住民側は「私たちを信用していないのか」「プライバシーをどう理解しているのか」と担当課にぶつけた。残念ながらその後をフォローしていないけれども、生活ごみ排出と住民の良心を問わなければならない時代が訪れている。

 (自治大阪編集委員会顧問  
時事通信社元大阪支社長)